

とある夏の日の午後、学校が夏休みも近いこともあり、私の心は浮足立っていたのかもしれない
そのせいであんなことになるとは…

なあ、うちの学校にこんな怪談があるの知ってる？

南棟の3階の隅にトイレあるじゃん

あそこに出るらしいぜ



種付けおじさんが



種付けおじさんの怪

なにその種付けおじさんって？

さあ

なんか黒くてでかいもやもやした奴らしいけど

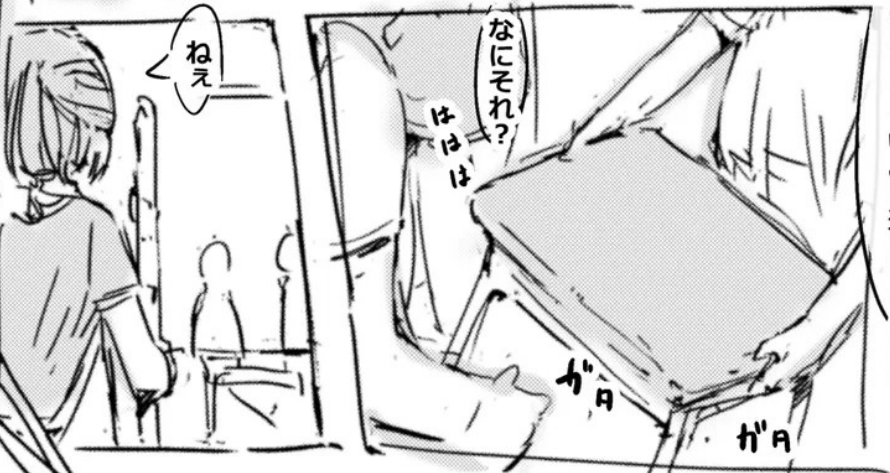


じぼーって叫ぶと逃げてくらしい

なにそれ？

ははは

ねえ



くだらない話しないで早く掃除して帰ろうよー

矢壁 美香 (OS5)

なんだよ美香、お前さては怖いんだろ



はあ？くだらないからくだらないって言ってるのになによ怪談なんて子供っぽい

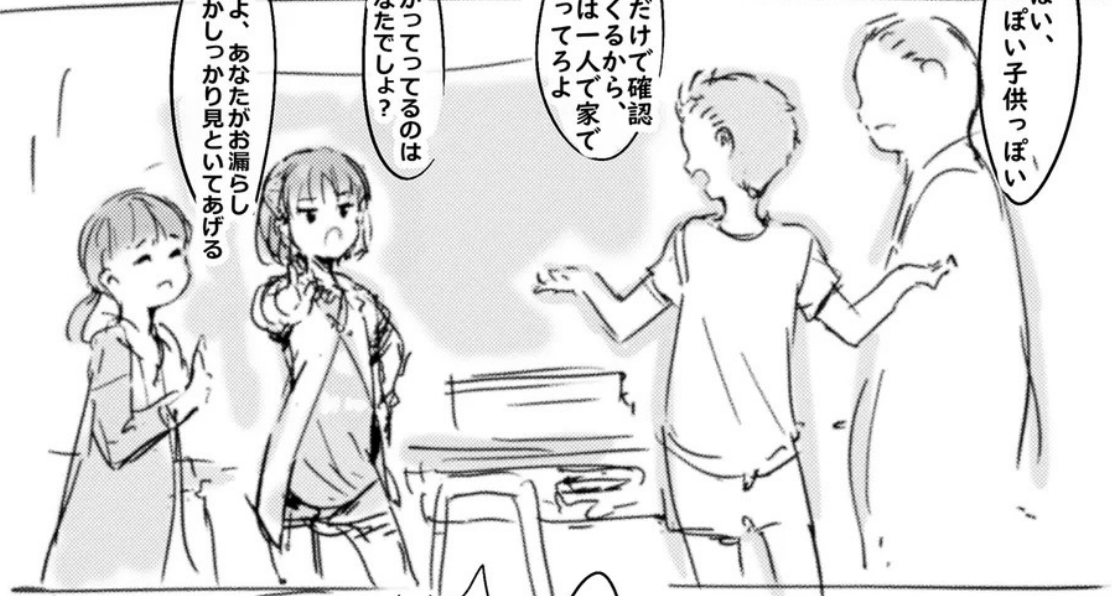


はいはい、子供っぽい子供っぽい

俺達だけで確認してくるから、お前は一人で家でブルってろよ

恐がつてるのはあなたでしょ？

いいわよ、あなたがお漏らししないかしっかり見といてあげる

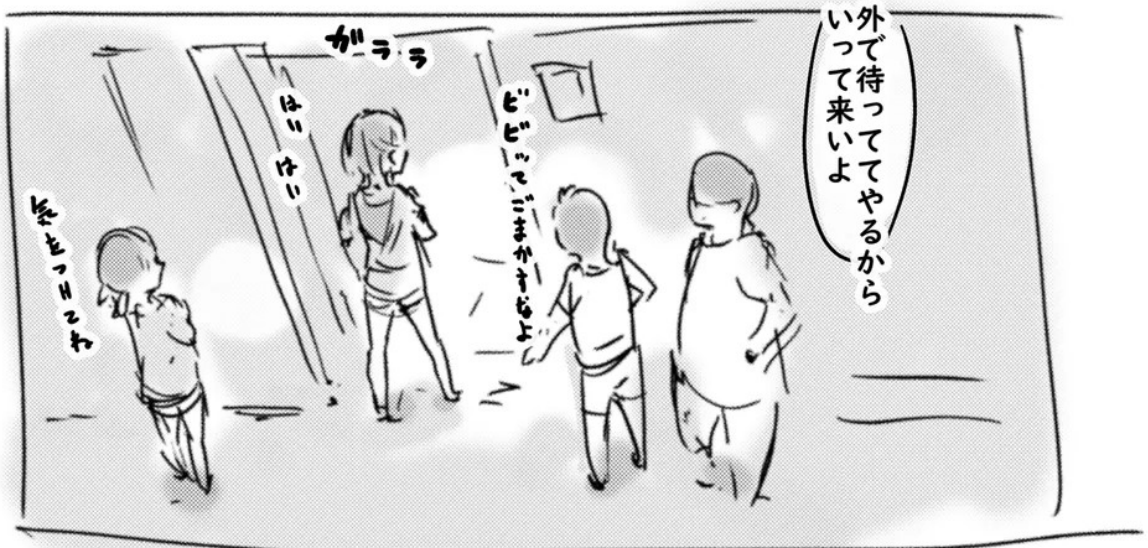
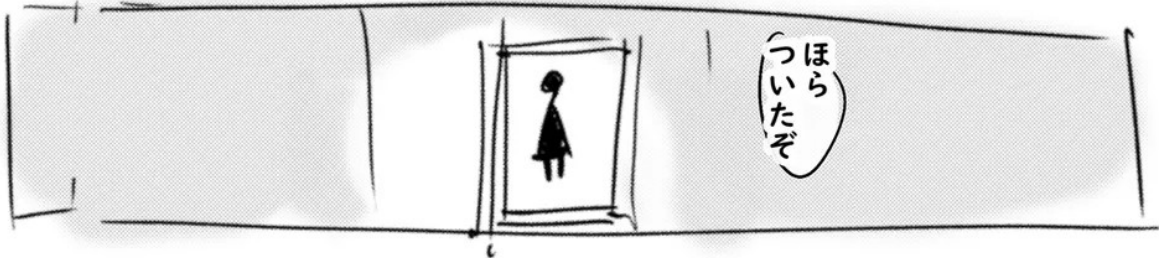
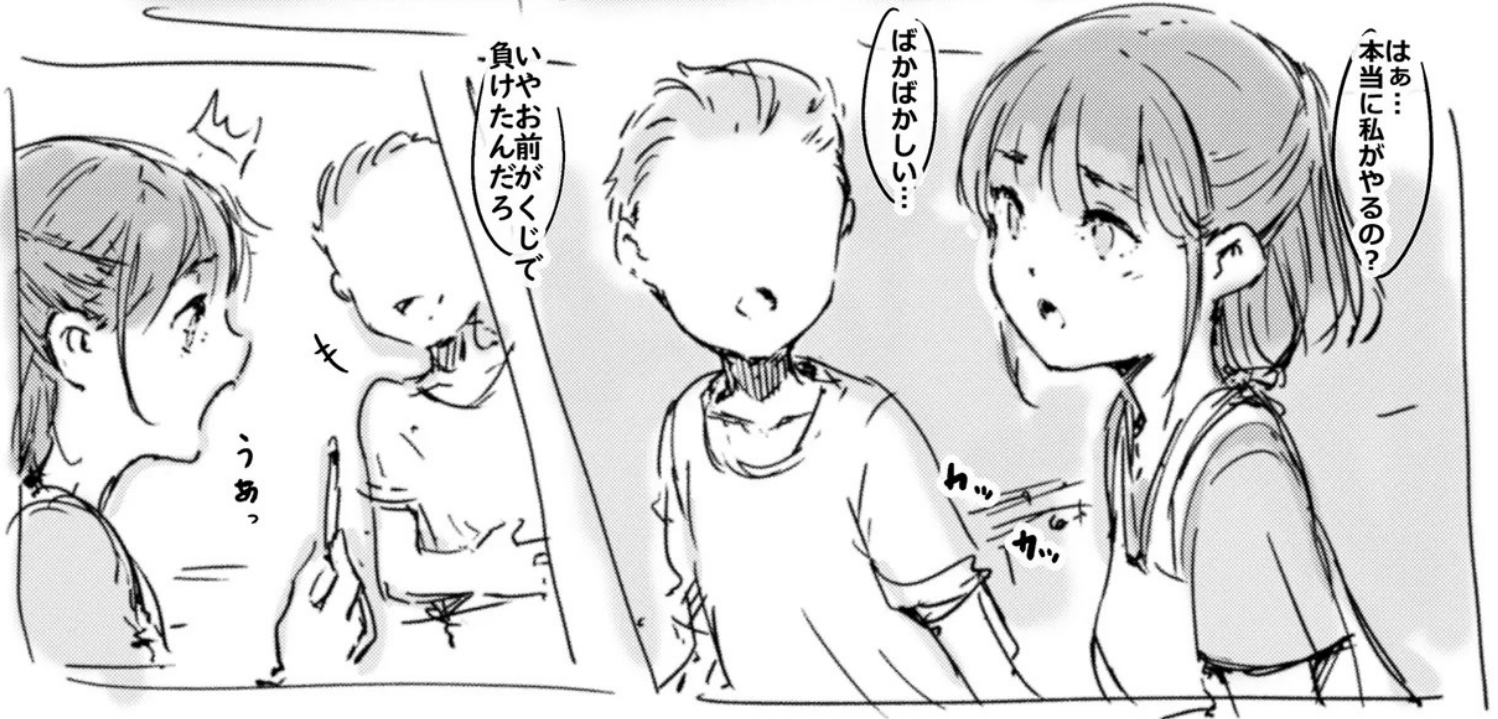
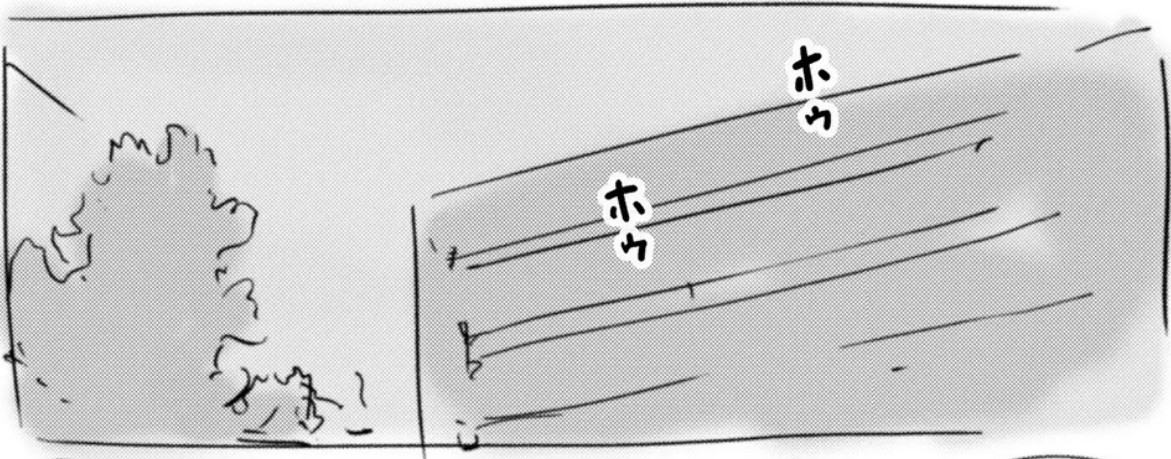


佐藤の奴〜！

美香ちゃん佐藤くん相手にするとムキになるね

はっ？ちがつ！あいつがとんでもない馬鹿だからっ！







なんでこんな事してんだろ...
早く済ませて帰ろう...

下着を
脱ぐだけ...!

ズルッ

バタン



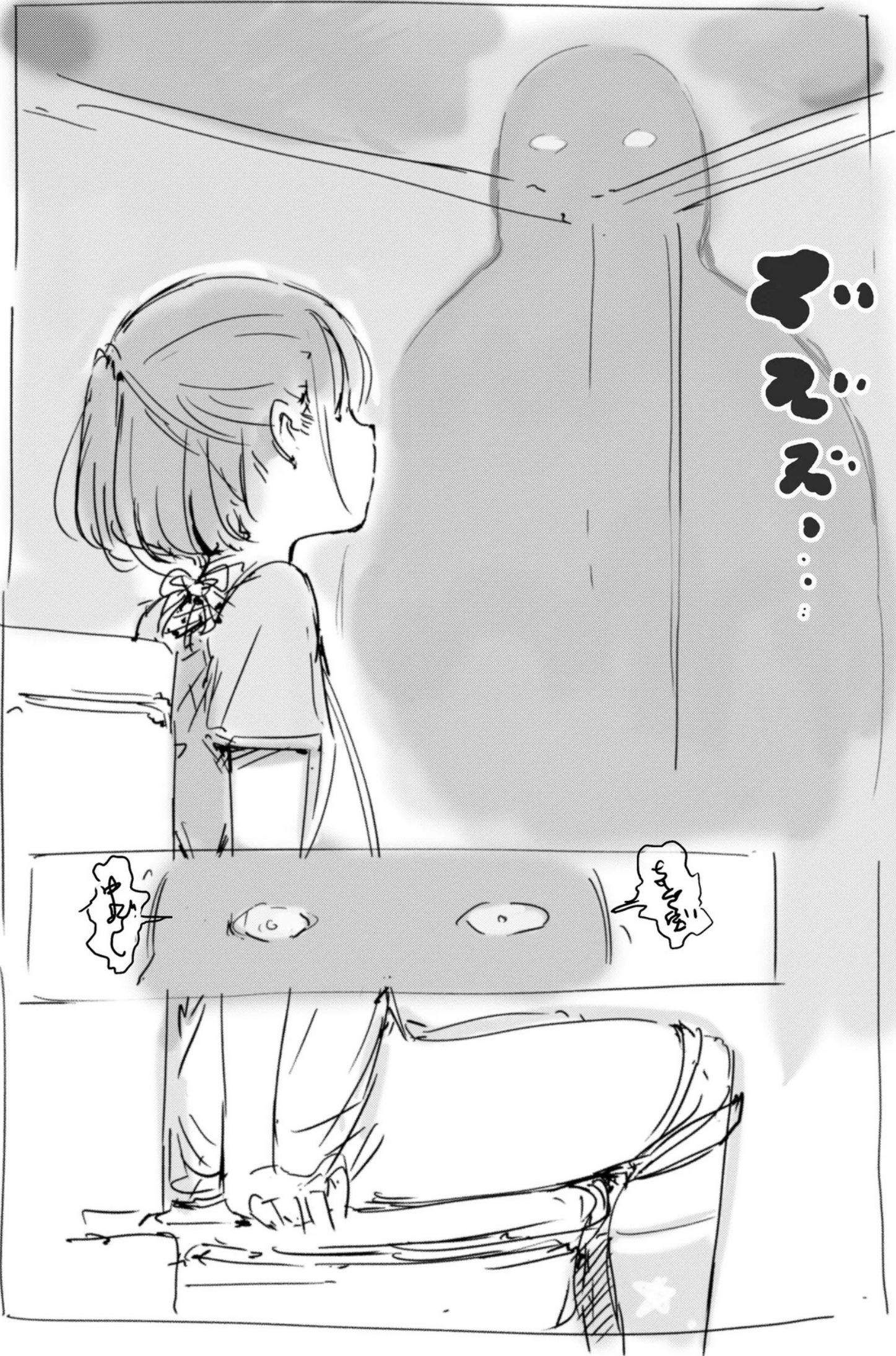
私はこのとき、こんな幼稚なことは済ませて
はやく帰りたい気持ちでいっぱいでした

種っけおじさん

あそびませよー

これで終わりって...

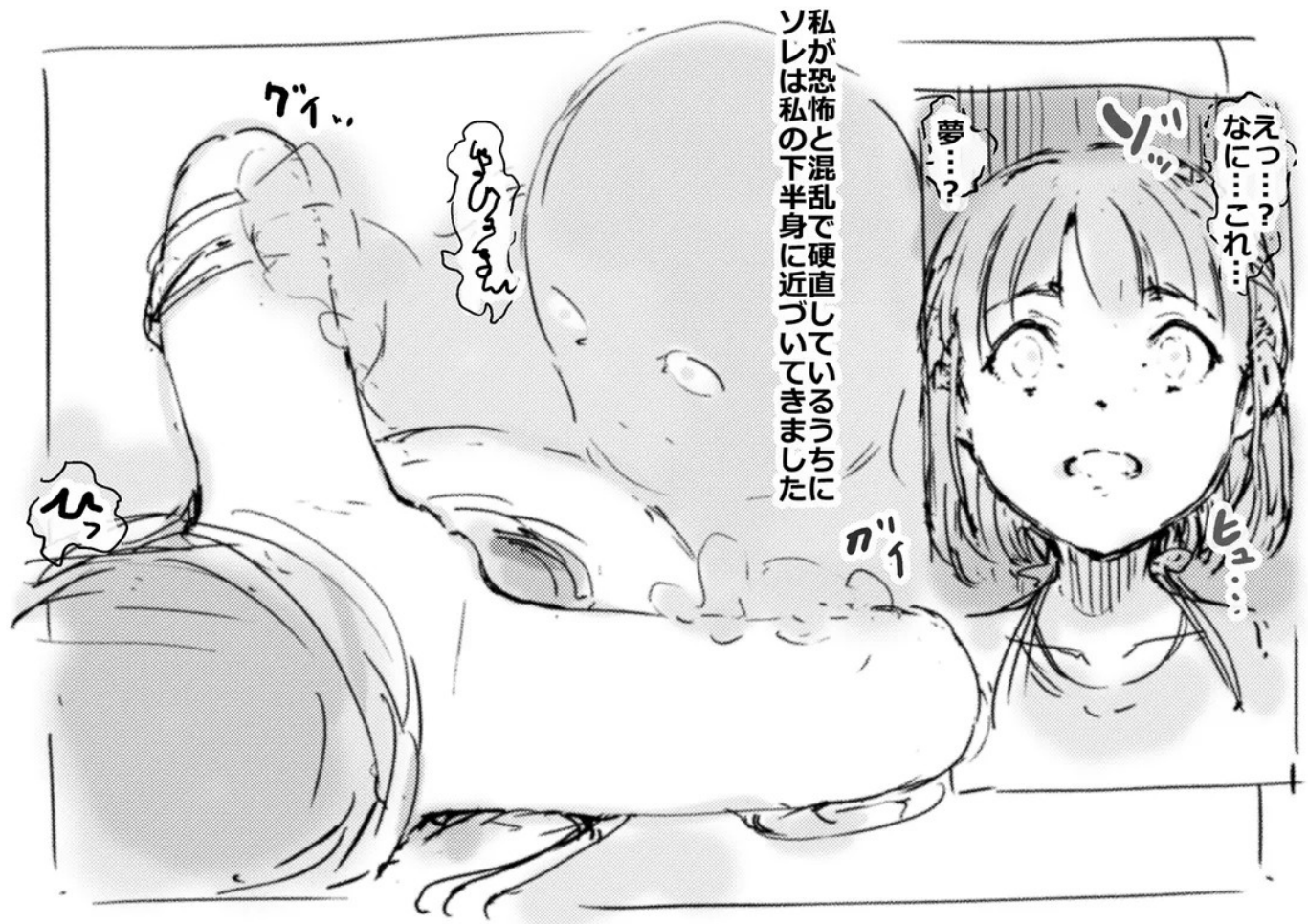
いっしょ



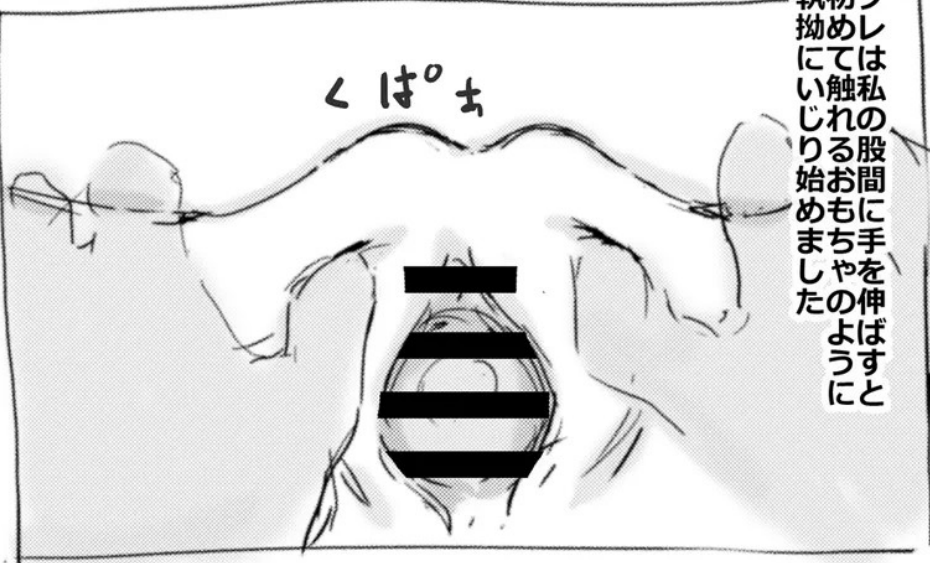
ド
え
え
え

ド

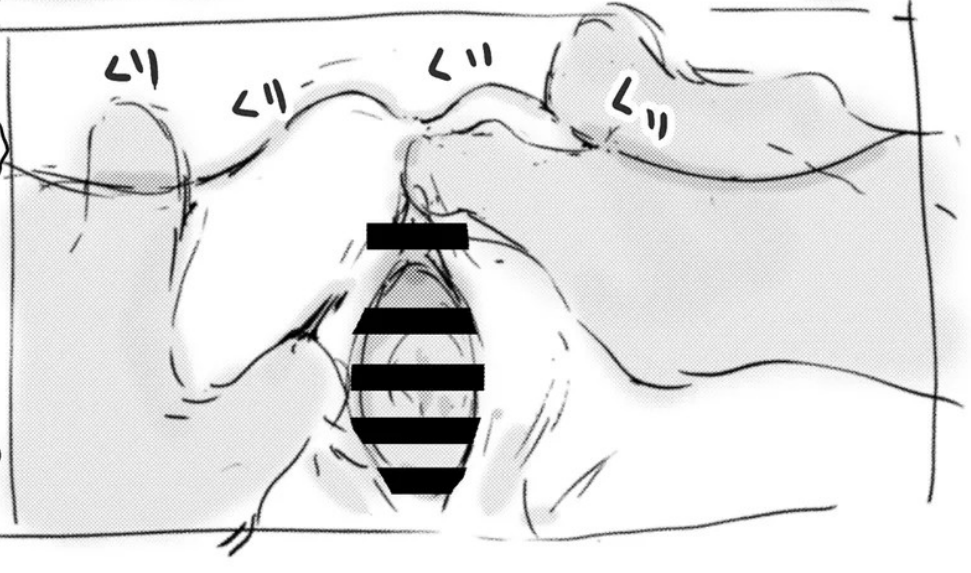
え



私が恐怖と混乱で硬直して近づくに
ソレは私の下半身に近づいてきました



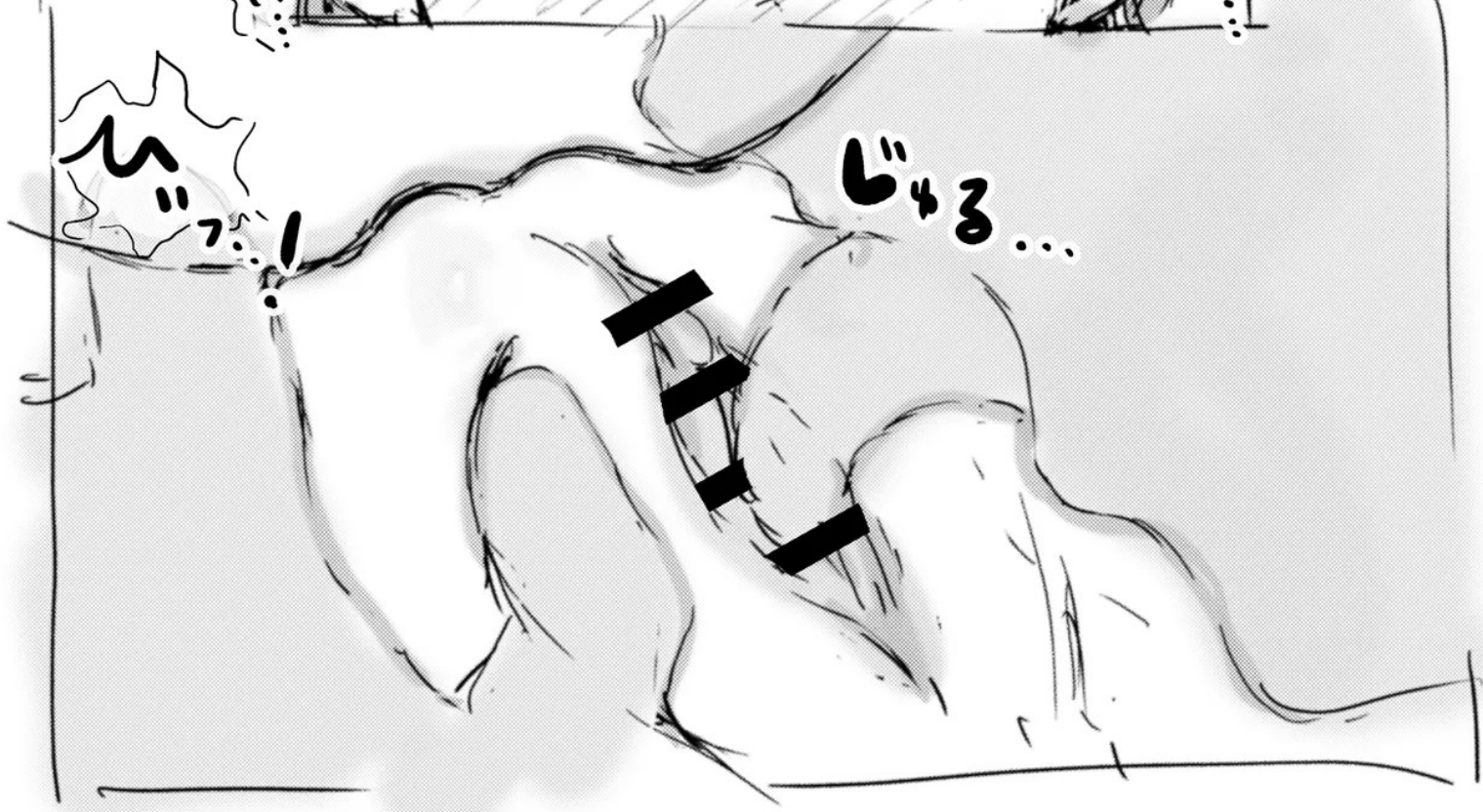
ソレは私の股間に手を伸ばすと
初めに触れるおもちやのよう
執拗にじり始めました



私はソレがする事に抵抗できませんでした



自分でも弄ったことのない私の大事なところを
好き放題にされる恥辱と恐怖で、私の頭の中は
滅茶苦茶になりそうでした



ぬるりとした感触が私の下腹部に走り
悪寒が背筋を駆け抜けました

ソレは私の股間に口を押し付けると、
じゅぶじゅぶと音を立てわたしの
アソコを舐め始めました

徐々にソレは私のなかに侵入をし、
ぬめぬめとした粘液が私の体の中を
入りぬめぬめとした悪感で私の限界を
出たりする嫌いました





ん
あ
あ
あ
あ

フ
シ
ャ
ア
ア
ア
ア

フ
ッ

フ
ッ
ッ
ッ

た
た

なんなのこれ

どうしては

たしか親治の
おまじないが



僅かに冷静さを取り戻した私は
その言葉を必死で叫びました



ほ
ほ
ほ
ほ
ほ

じ
い
ほ
ほ
ほ
ほ
ほ

恐怖が限界を超えて一周したのか
羞恥心が上回ったのか…



その言葉を聞くとソレの雰囲気がからりと変わりました

私は直観的に自分が間違った選択をしたのだと悟りました

そこからソレの態度が一変しました

金切り音の様な怒鳴り声をあげながら私を乱暴に抑え込むと、棒状の何かを股間に擦り付けてきました

ひとしきり私の股間にそれを擦ると満足したのか、それは突然動きを止め私から離れました

私が安堵の表情を浮かべると、ソレはおもむろに棒の先端を私に押し付けてきました

そして...

薄黒く生臭いそれが私にはとても危険な凶器のように思えました

ブル
ブル

や...
や...
や...
や...
や...

ズル...

ガッ

ズル...

しゅ...
しゅ...

しゅ...

ん...
なに...?

なに...
なに...
なに...



ドブドブ

下腹部を駆け抜ける鋭い痛み、
そしてお腹の中に物を突き入れ
られた強烈な異物感…

私はお腹を刺されたのだと思い
頭の中はパニックになってしまいました

クワッ

カチカチ

グッ

グッ

グッ

繰り返される抽入と、体の奥から湧く奇妙な感覚に頭が朦朧としていき、ソレが突然耳元で囁いてきました

バクッ

バクッ

私はそれに嫌な予感を感じ、抵抗を試みました

ちゅぽっ

ちゅぽっ

やだま

ちゅぽっ

でもソレは私のそんな抵抗を見て寧ろ興奮し動きを激しくしているようでした

私の懇願を一顧だにせず、動きを増していくそれが、一際大きく私の中に突き入れられると、突然動きが止まりました

ハメて

トキ

トキ

グン...グン...グン...グン...グン...

ん





どきどき

どきどき

どきどき

どきどき

どきどき

どき

どき

どき

どき

ソレがぶるつと身震いをする、
暖かい何かの奥に吐き出さ
れるのを感じました

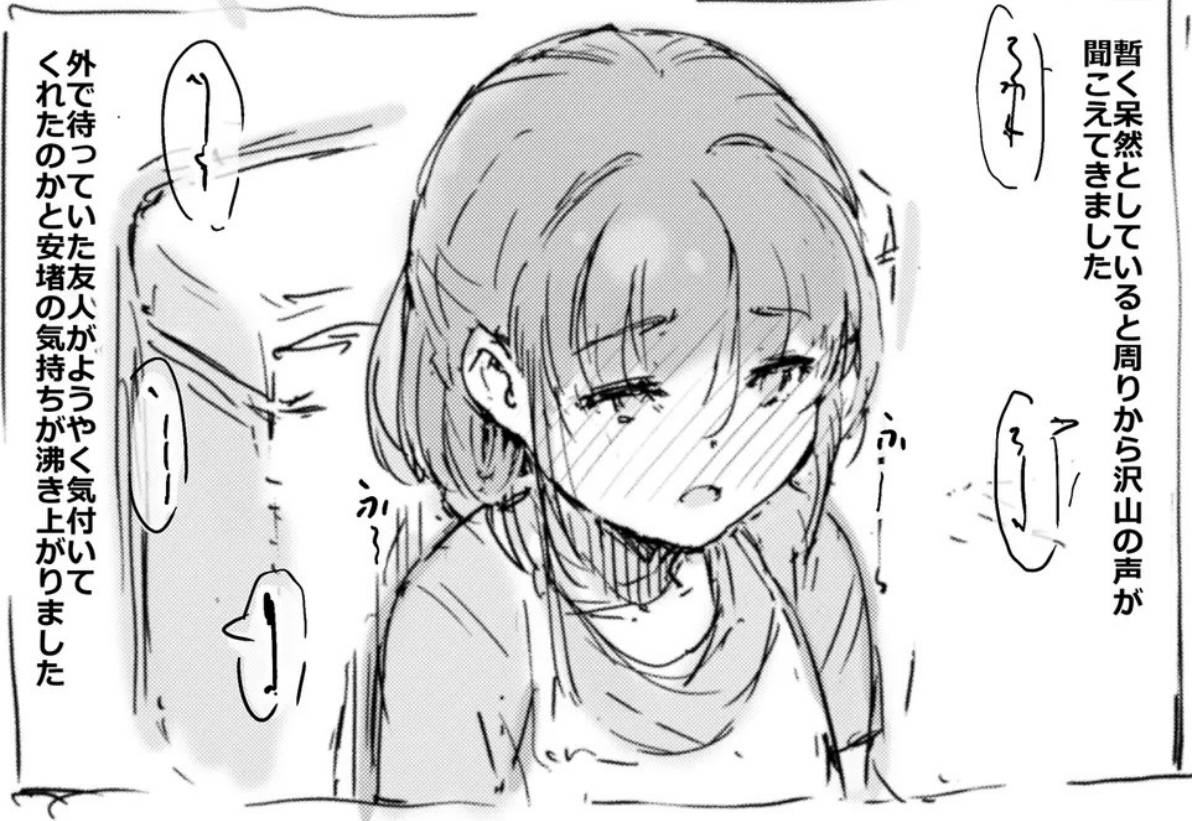
私の胎内から引き抜かれたそれには
生臭い白濁液がまとわりついていました

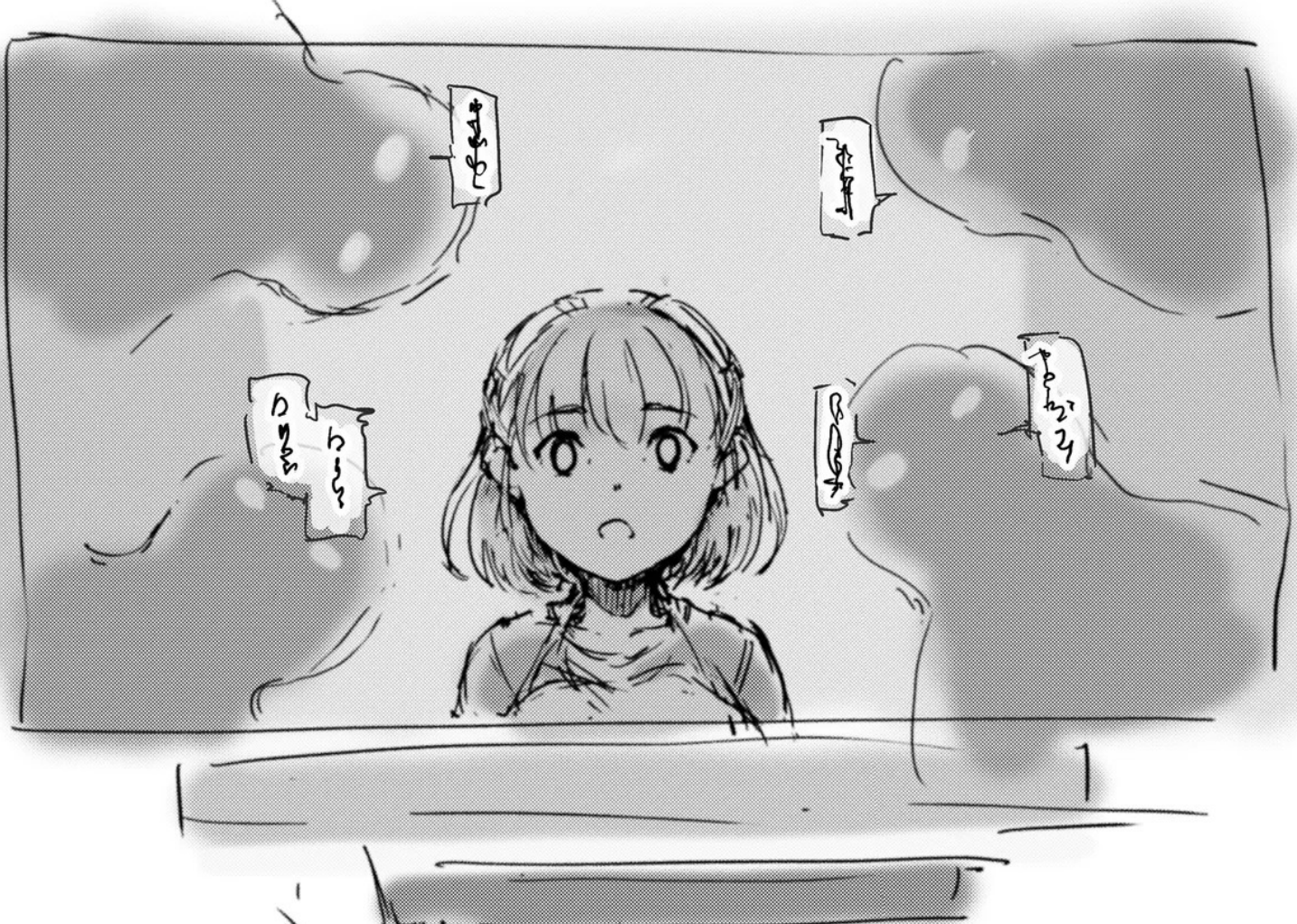
ソレ自体はまるで実体感を感じないのに
その白濁液はとも生々しく、その事が
何故か私を不安にさせました



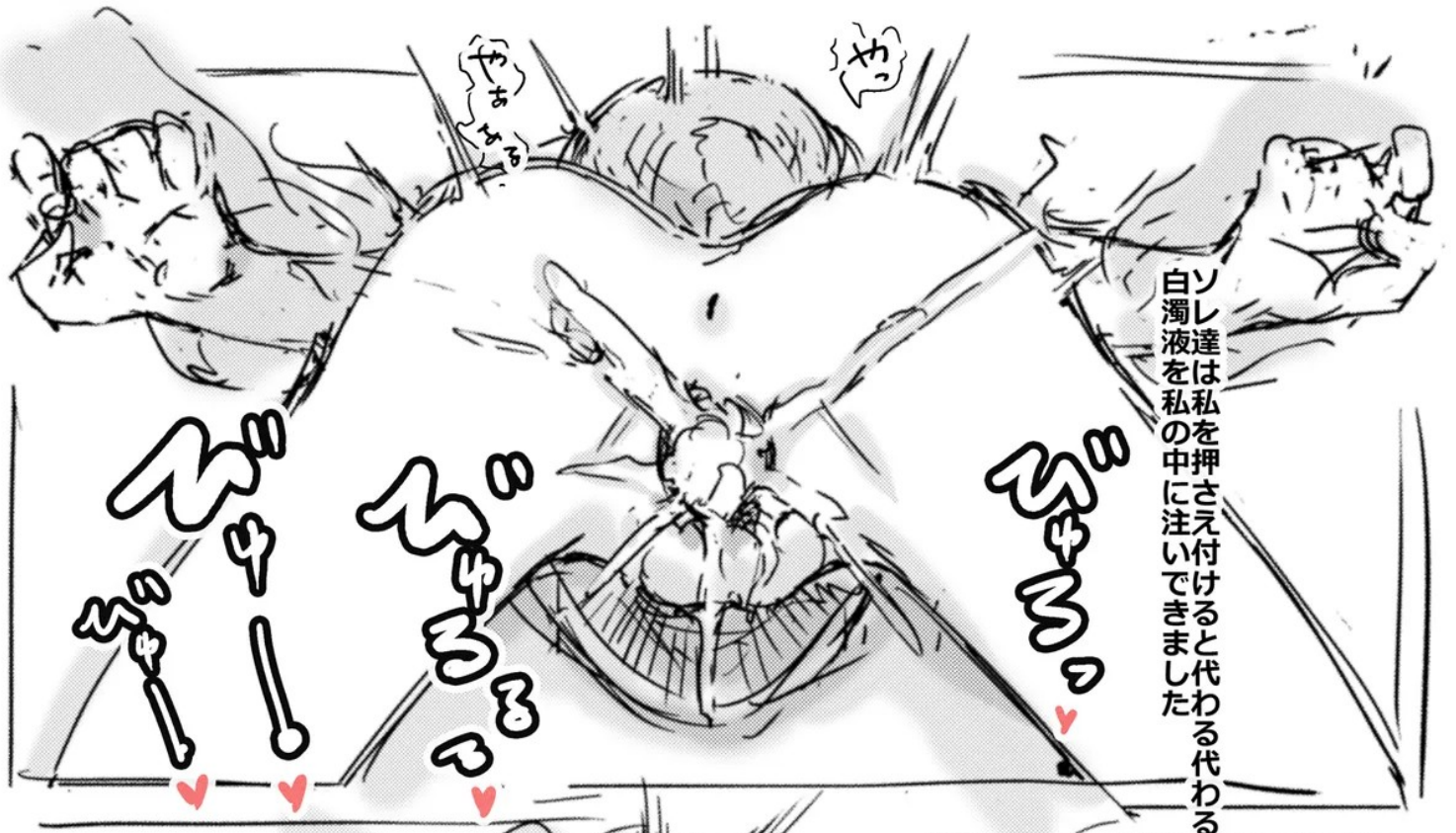
暫く呆然としてしていると周りから沢山の声
聞こえてきました

外で待つていた友人がようやく気付いて
くれたのかと安堵の気持ち上がりました





そこから先の事はあまり覚えていません



ソレ達は私を押さえ付けると代わる代わる
白濁液を私の中に注いできました

次第にソレ達の行為はエスカレートしていき
口やお尻の穴にも挿入れてくるようになってきました



私の穴という穴に白濁液が流し込まれ

私の股間が赤く腫れあがり
中に股間が出たものが溢れ出てきて
ソレ達は止めることはありませんでした

溢れかえる生臭い匂いと絶えることなく
襲ってくる刺激に、私はもう何も考えられませんでした





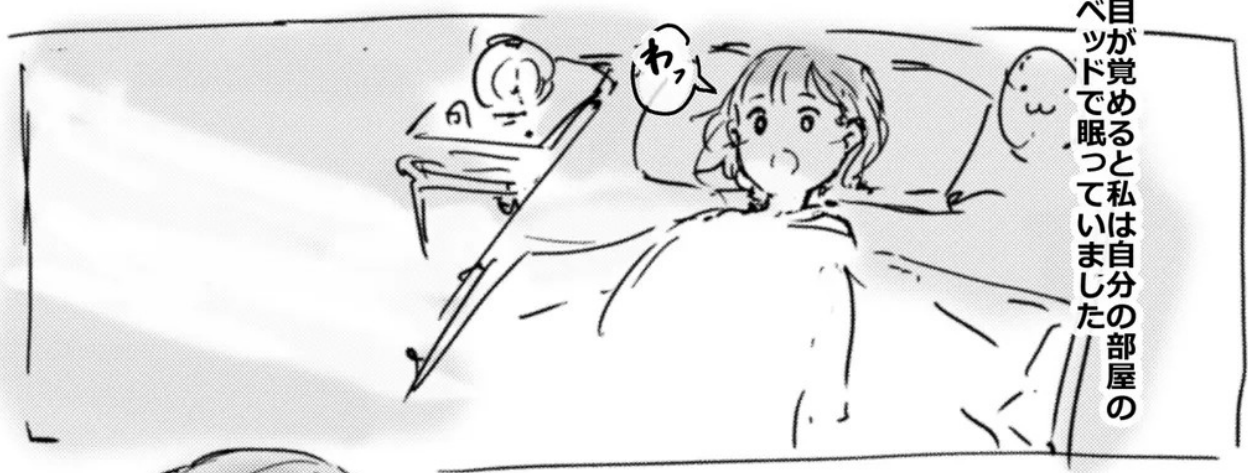
薄れていく意識の中

おあおあ...

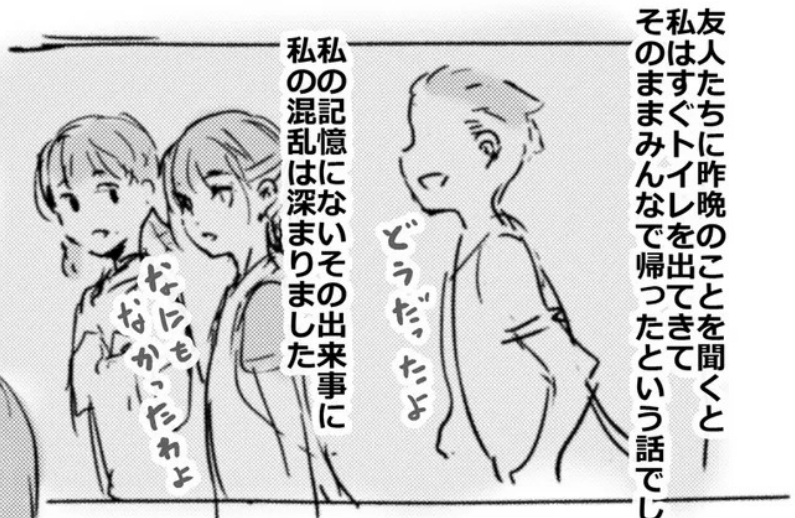
もうおんない...

私は下腹部がかすかに暖かくなるのを感じました

フィル...



目が覚めると私は自分の部屋の
ベッドで眠っていました



私の記憶にないその出来事に
私の混乱は深まりました

友人たちに昨晚のことを聞くと
私はすぐトイレを出てきて
そのままみんな帰ったという話でした

どうだったよ



昨日のアレは私の見た悪夢だったのでしょか…

あーん (ニムニム)



……でもわたしはお腹に今でもソレの存在を感じています…

